# 東京農業大学
# 拓友会ニュース

第23号・2007年発行
発行所　東京農業大学拓友会
〒156-8502　東京都世田谷区桜丘1-1-1
TEL:03-5477-2404　FAX:03-5477-4032
e-mail:takuyu@nodai.ac.jp
http://www.nodai.ac.jp/int/original/about/index.html

## 第49期総会および懇親会のご案内

詳細は p.14 をご覧下さい。

第49期の拓友会総会および懇親会を次のとおり開催致します。

今年度も収穫祭期間中になります。数々の特別イベントも計画されているようですので、万障お繰り合わせの上、多数ご出席下さいますようご案内申し上げます。

**なお、平成19年の収穫祭は11月２日～11月４日に開催されます。**

**総会**

１．日時　平成19年11月３日（土）
　　午前11時より12時まで
２．場所　11号館２階　化学系実験室（造園科学科の建物）

**懇親会**

１．日時　平成19年11月３日（土）正午より
２．場所　11号館２階　化学系実験室

## 最後の拓殖科生

専拓八期　黒川　泰三

専門部拓殖科は、昭和20年4月1日入学の八期生をもって最後とする。だが、その八期生の顛末は波瀾万丈そのものであった。

その年、当時の世界の列強国の多くを相手取った戦争に、まさに日本は追いつめられていた。戦線は敗勢覆うべくもなく、国内は窮乏を極めていた。

そのような情況を背景として、通例よりも早い４月１日に八期生の入学式が行われた。新入学生は80名。ほかに追加合格者、遠隔地の者ら15名がいたが、これらは当日の入学式には参加していない。式と呼ぶには程遠く、当時渋谷区青山にあった大学の拓殖科の一教室に集められた新入生は、大学側代表の住之江金之学科長より型通りの歓迎挨拶を受けた後、同科主事太田正充助教授より、いきなり実習農場への即時参加の説明を受けたのである。行先は当時、大学管理下にあった満州（現、中国東北地区）の湖北農場という。

新入八期生の年齢は満16～17才、壮丁（徴兵検査）直前の若者たちであり、戦時国策協力に全国民が、そのすべてを傾けていた時代である。実習兼食糧増産学生勤労報国隊という名目は、新入生への説得力として充分であった。全員が満州農場行を応諾した。これが後に起こる悲劇の幕開けとも知らずに。

出発は同月10日、つまり通例よりも早い入学式は渡満計画から逆算した結果であった。すでに前月、３月６日から13日にかけて米軍による日本大空襲により、主要都市の大半は大きな被害を蒙り、社会機能は満足に働かなくなっていた。それにも拘わらず、東京農大学生報国隊一行は国家の最低限の便宜供与を受け、予定通り東京駅を出発した。この一行は79名の第一次隊であり、後に同目的で第二次隊15名、第三次隊２名が参加する。すなわち、拓殖科八期生の学生数は95名であった。

第一次隊の引率責任者は学生課主事、斉藤芳郎、ほかに七期生６名が介添人として同行した。以下、渡満過程、農場生活、ソ連軍参戦による避難状況、その間における八期生の犠牲事情等については、拙著『凍土の果てに』に詳述したので、ここでは資料的に要点のみ記すことにする。

昭和20年（1945年）

４月21日　満州国湖北実習農場着。当時の農場は組織上は前出の太田助教授が農場長、副長が佐久本嗣秀（旧拓四期）。他に前年より越冬滞在の六期生３名、七期生４名が農場を維持していた。

６月中旬　玉垣憲爾補職が責任者代行として着任。第二次隊15名が到着する。交替のように前記斉藤主事が帰国。

７月初旬　玉垣補職、現地より応召。六・七期生の多くが壮丁を受ける。また、太田主事が第三次隊（八期生２名を含む、一般人30名で組織された常盤松開拓団<注>）

を引率し、日本を出発したとの報あり。

（注）常盤松開拓団とは、農大実習農場に定着入植する目的で一般人を募集したもの（結局、途中牡丹江にて終戦に遭遇し、農場へは三次隊全員、未着）。

8月10日　ソ連軍対日参戦、直ちに満州国へ侵攻。農大実習農場はソ満国境近くに位置しており、在農場員は即日避難開始。その後、終戦を知らずに一ヶ月に及ぶ逃避行となる。

9月10日　ようやく終戦の報を得てソ連軍に投降、収容所生活に入る（牡丹江、海林（ハイリン）収容所）。

9月下旬　海林収容所から解放され、貨物車にて満州東北部の著名都市ハルピンに到る。

この地にて農場脱出以来、集団を組んでいた「農大学生隊」を解散、以後の行動は各個人に任される。各個人の判断といっても所詮は16・7才の考え、加えて異国での放浪の身。成り行きに任せてハルピン、新京（現、長春）、奉天（現、瀋陽）、撫順その他に分散避難、それぞれの地の日本難民収容所に収容される身となった。

この収容所生活が、八期生にとって初めての酷寒の地、その年の冬を越す体力も知力もなく、各地で死亡を重ね、その数58名に及んだ。この数字は実に八期生の62%強にあたる。この時点で太田主事も佐久本副長も物故されている。

翌21年、幸運に恵まれた33名の生存八期生は分散帰国。同年末より22年初頭にかけて、これ又分散復学したところ、いつの間にか拓殖科二年生となっていた。大学も又、渋谷区青山を焼け出され、世田谷区内の木造の旧軍施設跡に移転していた。当時の学科長は伊東信吾助教授（後に教授）、研究室も校舎も隙間だらけで文字通りお寒い限り。だだっ広いだけの校庭のあちこちに、旧日本軍の戦車の残骸が転がっているのが妙に印象的であった。

22年3学期に入って間もなくGHQの指示により、拓殖科は開拓科と科名変更を余儀なくされる。この時点で在科生は三年生（旧拓七期）、二年生（旧拓八期）のみで、新入生の応募入学は皆無。かくて同年3月、3年生の卒業と同時に開拓科は廃科となり、残った2年生（旧拓八期）は昇年と共に他学科へ無条件編入が認められ、多くは農学科へ編入した。これが拓殖科の終焉である。

旧拓八期生は農学科編入後、はじめて学生々活らしい日常を送ることになるが、満州における物故学友への思いは捨てきれず、慰霊運動に多くの時間を費やす。たまたま22年の12月、旧拓八期生は農大在学中ただ一度の収穫祭に参加し、当時、大っぴらに歌うことが遠慮されていた満州放浪歌をはじめ、満州農場で声を張り上げた蛮歌や踊りを高々と再現して見せたりした。

23年3月、起伏に富んだ三年間に別れを告げ、旧拓八期生は農学科を卒業する。卒業にあたり、満州殉難学友の遺影集及び慰霊文集“しらかば”を記念作成した。又“銀杏”の幼木を記念植樹した。現在、本部脇にある横井時敬博士像の向かいで、しっかり大きく育っている木がそれである。さらに大学卒業後、節目ごとに合同慰霊祭を実施してきたが、昭和52年、念願の慰霊碑を図書館前に建立した。大学内外の関係者の理解と協力によったことは勿論である。そして、これらを総括するように59年、東京農業大学満州農場殉難者の記録“凍土の果てに”が刊行され、われわれ八期生は、ようやく戦禍の呪縛から解放されたのである。なおこの碑には、職員2名、六期生2名、七期生1名が犠牲者として含まれ、計58柱が合祀されている。

現在、満州農場経験の旧拓六～八期生による湖北農場同窓会が慰霊碑の護持に努めており、又、一部の同窓生は現地、旧実習農場を訪問し平和祈念をするなどして、がんばっているものの、われわれの多くは昭和3年生まれで今年が喜寿、老化はまぬがれない。この私たちの体験を、いつまで語り継ぐことができるだろうか。語り継いでくれる人がいるだろうか。

昭和23年3月、農学科卒業記念写真
この中に旧拓八期生が点在している

昭和22年11月校庭には旧日本軍戦車が放置されていた。
乗っているのは筆者（黒川）

昭和22年12月、収穫祭で蛮声をあげる旧拓八期生

昭和52年5月、完成したばかりの慰霊碑

## 国際食料情報学部国際農業開発学科の50周年記念式典

国際食料情報学部国際農業開発学科の50周年記念式典が平成18年11月11日、世田谷キャンパス百周年記念講堂において挙行されました。式典は東京農業大学・東京農業大学短期大学部大澤貫寿学長、学校法人東京農業大学陶山一雄常務理事、校友会戸神重美会長、教育後援会新井健一会長、東京農業大学拓友会大川純一会長をはじめ、大学関係者および本学科卒業生の157名並びに在学生160名の出席のもとにとり行われました。式典では国際農業開発学科高橋久光学科長の式辞、来賓の挨拶並びに祝辞のあと、国際農業開発学科並びに拓友会の発展に尽力された太田保夫、小野功、河合省三の国際農業開発学科元学科長、原瀬利、藤井勝政、赤地勝美の拓友会元会長、田中博也、山本正也拓友会役員に感謝状が贈られました。

現在の国際農業開発学科は、大正15年11月に発足した「植民研究会」を母体に、昭和12年に専門部農業拓殖科が設立され、昭和13年に１期生78名が入学したことに始まります。専門部農業拓殖科のあゆみは敗戦により一度途絶えましたが、昭和31年、農業拓殖学科として再出発し、それから半世紀を経ました。この50年の節目のお祝いにブラジル、アメリカなどの海外に移住した卒業生も一時帰国されて参加し、式典に続いてレストランすずしろで行われた記念祝賀会は盛会に終わりました。さらに、祝賀会の閉会後は研究室、農友会諸団体や同好会ごとのＯＢ会が開催され旧交を温めました。なお、国際農業開発学科では記念事業として50周年誌、国際農業開発学誌を刊行しました。

国際農業開発学科50周年記念実行委員長
高橋　久光

50周年記念式典

50周年祝賀会

真珠　宝石　アドバイザー

40年の
信用と実績

株式
会社　タナカ通商

社長　田中博也　（専拓6期）
〒105-0004　東京都港区新橋1-5-6　第5芝口ビル2F
JR新橋駅3分
TEL　03-3571-3088
FAX　03-3571-3089

酒類食品問屋
大星岡村株式会社　横浜支社

代表取締役
支社長　岡村　忠雄　（専拓７期）
横浜支社　〒231-0038　横浜市中区山吹町 1-7
電話　(045)261-2071(代)
FAX　(045)261-4264
湘南営業所　〒253-0071　神奈川県茅ヶ崎市萩園 1270-43
電話　(0467)57-0103(代)
FAX　(0467)57-0208
本社　〒104-0033　東京都中央区新川 1-7-8
電話　(03)3552-3111(代)
FAX　(03)3551-7895
インターネット　http://www.oboshi.co.jp/

## 50周年記念奨学金への募金のお願い

国際食料情報学部国際農業開発学科の50周年記念事業によせられた寄付金をもとに50周年記念奨学金が創設されました。この奨学制度は経済的な理由等で就学が困難になった在学生に対して経済的な支援を行うものです。この制度は平成19年度より施行されていますが、基金が50周年記念事業寄付金から事業費を支払った残金をもとにしているため、まだ脆弱であるのが現状です。50周年記念事業にあたり寄付のお願いを差し上げて、再度お願いを差し上げるのは甚だ失礼とは存じますが、日頃より本学科の発展に力強いご支援と深いご理解を頂いております卒業生の皆様ならびに関係各位に、ご厚意、ご協力を賜りたく、募金をお願い申し上げる次第です。

国際農業開発学科学科長　高橋　久光

専門部農業拓殖科の旗

**募金に関するお問い合わせ**

振込用紙を送付させていただきますので、ご支援下さる方は国際農業開発学科　中曽根勝重まで

Tel 03-5477-2419　Fax 03-5477-4032

E-mail　katsu10@nodai.ac.jp

なお、振込口座は　郵便局　00120-1-593581

口座名　東農大開発学科50周年記念会　です。

## 小野先生ブラジル50周年

2007年３月５日東京農業大学卒業生アマゾン移住50周年の式典が行われた。式典には国際食料情報学部学部長　豊原秀和教授、国際農業開発学科　学科長高橋久光教授、三簾久夫准教授と本学名誉教授の小野功教授が出席した。出席した小野功教授の記事が日本経済新聞2007年６月８日p.40に掲載された。ご覧になった方もいらっしゃると思うが、簡単に記事を紹介したい。

**「1957年3月、ブラジル海軍の軍艦で東京を出航した３人のOBがこの地に降り立ち、戦後の農大生の海外移住が始まった。卒業生の海外移住者は北米、中南米を中心に50年でおよそ500人。ブラジルには200人が渡っており、式典には同国各地から50人ほどが出席した。専門知識を生かして活躍する卒業生との再会に50年前の助手時代から移住者にかかわった私も感慨深かった。**

**炭鉱閉山などで失業者があふれ農村も過剰な人口を抱えた時代に卒業生を組織だって海外へ送り出すようになったのは、千葉三郎学長の下、農業技術者を育成する農学部農業拓殖学科（現・国際農業開発学科）が創設された56年のことだ。農業拓殖学科の杉野忠夫初代学科長は『ゴリラのようにたくましく、神のような英知を』と号令をかけ、学生と鍬をふるい、千葉の海軍兵舎跡に校舎と実習農場を造り、移住先で生き抜くための農業技術、強固な精神力や体力を学生に身につけさせた。53年に海外移住が再開し、ブラジルが日本人の受け入れを表明すると血気盛んな若者に移住の機運が高まった。**

**57年に身元保証人と受け入れ先がほぼ決まると、百数十人の移住希望者が殺到したが、家族の反対や受け入れ先の事情で、残ったのは７人。うち３人が軍艦でアマゾンにたどり着いた。50年代、この地は日本人が持ち込んだコショウの相場が暴騰し、黒いダイヤと呼**

日本経済新聞　2007年（平成19年）6月8日（金曜）

文　化

アマゾン開拓、農大の血気

小野　功

**ばれて莫大な富をもたらした。しかし、60年末から大発生した根腐れ病や胴枯病で壊滅状態になった。これを復活したのが『軍艦組』の一人、坂口陞氏。氏は農作業の効率化で森林を伐採したのが病気発生の理由と気付き、自然の森林のようにコーヒーやカカオなどを混合して植える熱帯森林農法に切り替えた。これにより本来の生態系を活用して、森の豊かさや生物多様性も保全されるようになった。『自然から学び、共存させてもらう』と口にしたこの取り組みはブラジルでも高く評価されている。**

**千葉先生と杉野先生の墓はアマゾンの地にある。多くの日系人の先達とともに眠る先生方は、屈託なく語る卒業生の言葉に顔をほころばせていることだろう。」**

1908年４月28日、日本人781名を乗せた第１回移住船「笠戸丸」が神戸港を出航し、約２ヶ月の後、６月18日にブラジル・サントス港に入港。ここに日本人のブラジル移住が始まった。以来、来年2008年で100年。笠戸丸から始まったブラジル移住者の子孫は、現在で

ブラジル50周年式典での分会長山中氏の挨拶

は140万人を擁するとも言われる世界最大の日系社会を築き、日系人はブラジル国内でも高い評価を得るようになっている。日本人ブラジル移住100周年にあたる2008年は「日本ブラジル交流年」とされているが、私たちは東京農業大学卒業生アマゾン移住50周年と重ねて思いを馳せることになるだろう。　　（入江満美）

## ケニアへ

国際農業開発専攻博士前期課程１年
石原　北斗

昨年、国際農業開発学科を卒業し、同大学大学院に進学した後、二度目のケニアへ行くことになった。現在、現地にて調査を行っている。高校のときから始まったアフリカへの思いと、学部生時代のケニアへの渡航から現在に至るまでの経緯を話したいと思う。

### ケニアの大地を踏む

高校生のとき。僕も周りのみんなと同じように将来何をしようかと悩んでいた。アフリカに行きたいな、という思いはその頃からあり、まったく想像もつかないが、アフリカの大地で真っ青な空の下で活躍する自分を思い描いていた。2003年に47期として開発学科に入学した。農作業をするサークル緑の家に入会し、日々畑で汗を流し、日本各地で農業実習を重ねた。３年生になったときに、休学して海外に行こうと決め、先生方の協力もあり、2004年も終わりそうなころ、ケニア共和国へのチケットを手に入れることが出来た。願ってもないアフリカだった。国際植物遺伝資源研究所（IPGRI）で働く森元泰行氏（拓殖31期）の紹介のもとケニア国立博物館のKENRIKという植物や動物に関する在来知識を調査・研究している機関を紹介してもらい、学生ボランティアとして行くことが出来た。

2005年４月13日、ケニアに降り立ち、首都にあるナイロビ空港のゲートを出ると周り一面に壮大な草原が広がっていた。赤い土、黒い肌の人たち、青い空・・・。ついにケニアに着いたのだという感慨でいっぱいだった。僕のケニアでの生活が始まり、いろんな人の力は借りながらも、手探りの毎日であり、感動や憤り、そして自分の活動に対する自問自答の毎日でもあった。

### ケニア海岸地域へ

しばらくナイロビで過ごしたあと、僕は海岸地方へ出かけた。ケニア第二の都市であるモンバサから北に１時間ほど海岸沿いを走るとキリフィという町が見えてくる。かつては奴隷の交易場所としても栄えた場所である。村人は、ミジケンダという民族に属し、トウモロコシ、キャッサバ、ササゲ、緑豆などの他に、換金作物としてココナッツ、カシューナッツ、柑橘、マンゴーなどを育てている。研究者の人たちと村をまわって、村人と話していくと、伝統的に利用されてきた野菜が100種類近くあるというのだ。都市部でも主食であるウガリ（トウモロコシの粉を熱湯で捏ねたお粥のようなもの）と一緒に野菜を食べるのが普通であるが、都市部では野菜は、キャベツ、スクマ、トマトなど数種を数える程度であったので、農村部でこれだけの利用があるということに驚いた。しかし森元氏と話すと、その知識も失われつつある地域もあり、知識の衰退を守るための活動をしなくてはいけないと、熱く僕に語ってくれた。在来野菜を含め、この地で人々が持つ自然利用に関する知識や技術をもっと知りたいと思い、この地域で第二の生活をスタートさせた。

テントと食料を持って聞き取り調査の旅（手前が筆者）

第二の故郷!?　キリフィの集落の人たちと（左端が筆者）

**村に入る**

自分の調査が始まった。右も左も分からない状況だったが、まずは、ケニア人のアシスタントを雇い、食料やテントなどをバックにつめ、キリフィ地区の各地の農村をバスや徒歩で回り、村の人たちと話していこうと決めた。村々を転々とし、どんどんと村に溶け込んでいった。あるときは、同じ村に何ヶ月も泊まって現地の人と同じ物を食べ、土を塗って作った家に泊まり、一ヶ月以上シャワーも浴びず、生活をともにしながら聞き取りを行ったこともあった。これぞアフリカだという風景を見ながら、山羊を絞めて食べ、太鼓のリズムに身をまかせながら踊り、焚き火を見ながら満天の星空のもと、人々と語りあった日々もあった。その中で、その地域の人々の生活が見えてきたこともあった。ノートにどんな小さなことでも記録していった。そして、一見貧しい村なのに、野草をはじめ、昆虫、野生果実など自然を最大限利用しながら、生活しているということが見えてきたのだった。子供たちからも教えてもらうことが少なくなかった。毎日のように子供たちと行動を共にした。子供たちは植物の名前、昆虫の名前などを教えてくれ、とびっきりの笑顔を惜しみなく見せてくれた。水もなく一人で何時間も永遠に続くのではないかと思わせるブッシュの中を歩いた時は、ケニアの環境の厳しさと、人間の小ささを肌で感じた。一年間のケニア滞在を終えるころには、ケニアが「日常」になっていた。スワヒリ語や英語で話し、ウガリを食べることが普通になり、自分の顔もケニア人のように黒いものだと思っていた。実際は、写真を見て気づいたが、どれだけ日焼けしてもケニア人のようにはなっていなかったのだが。

帰国後、僕はやはり日本の農業のために自分の人生を賭そうと思っていたが、しばらくして、もう一度ケニアに行こうと決めた。自分に専門性を身につけるため、また害虫管理技術に関する研究を行うため、もう一回勉強しなおそうと決めた。そして、もう一度アフリカの地でアフリカの風を感じるために。

**2度目のケニア**

現在、ICIPE（国際昆虫生理生態学は、センター）の研究者と共同で、調査を行っている。ナイロビから500kmほど西に位置するヴィクトリア湖の湖畔の町に研究所はある。目の前が湖という絶好の場所だ。毎日ヴィクトリア湖で捕れたティラピアを食べ、しばしば市場に散歩に行く。湖を望みながら、爆音で鳴るルオ族の音楽と、人々の喧騒が入り混じった賑やかな場所を歩くのがここの楽しみでもある。

この地域をはじめ、ケニアの多くの地域で、トウモロコシにつく害虫、特にズイムシ類（茎に潜るガ類）に悩まされている。小規模農家にとって殺虫剤や抵抗性品種を購入することは難しく、また、殺虫剤による環境への影響も懸念されているため、低コストで、且つ環境に配慮したズイムシの管理技術が求められてい

住まい作りのトータルプランナー
宅地建物取引業　千葉県知事免許(7)第 6298 号
南房商事株式会社
千葉県茂原市高師 57 番地　電話 0475(23)3251(代表)

地域一番の品揃え　花と緑
TABLE GARDEN CENTER　契約農家直送、だからいつでも新鮮!!
テーブルガーデンセンター
TEL 045-935-4187(代)
〒226-0023 横浜市緑区小山町 611-3
代表取締役社長　篠原　敬一（拓殖20期）

る。このような現状の中で、現在、僕はズイムシ類の天敵としてのハサミムシに関する実験を行っている。８ヶ月という短い期間で成果を出すのは難しいが、ケニアの環境保全型農業の発展への一助となればと思い日々を過ごしている。

ここでの研究は、いい経験になっている。僕と同じ年のスイス人のインターンシップ生や、スペイン人のツェツェ蠅研究者、インドからの昆虫関係の研究者の他、敷地内に住む大学関係者や、NGO、教会関係者など、世界中から様々な人たちが集まるため、日々刺激ある生活を送ることが出来ている。また、研究者からは言うまでもなく、日雇いで働くワーカーの人たちにも教えられることが多く、昆虫の同定から飼育まで、いろいろなことを彼らからも学んでいる。このような環境で研究をすることは大変なこともあるが、得るものも多く、自分自身が成長しているということを実感できている。

最後に。開発学科で出会った人達、アフリカでお世話になった皆、また、ずっと僕を支えてくれた両親に感謝したい。まだまだ力足らずではあるが、これからも開発魂を忘れず、残りの人生をかけて社会を変えていこうと思っている。

炒めて食べると美味！
マウングと呼ばれる蛾の幼虫

## 入場者、さらに増加中　東京農大「食と農」の博物館

世田谷キャンパスを出て、馬事公苑へ向かうけやき並木。この並木によく調和したデザインの建物（設計隈　研吾氏）が、東京農大「食と農」の博物館である。現在、館長を務めるのは本学科の夏秋啓子教授。「食や農への関心が高まっている昨今、年間10万人を超えるペースで来館者を迎えています。特に、2007年３月に開催された『熱帯作物資源に潜む力展』は、迫力ある実物展示で大好評でした」。　日本熱帯農業学会創立50周年を機に企画された『熱帯作物資源に潜む力展』は、本学科の教員および卒業生が展示委員となり、日々、成長する巨大なヤムイモをはじめ、熱帯作物やその加工品が多数展示されて好評だった。また、館内のカフェ「プチラディッシュ」での休憩には、本学科卒業生が栽培指導する熱帯果樹「カムカム」のジュースがおいしい。さらに、隣接する「バイオリウム（財団法人進化生物学研究所）」ではマダガスカルの珍しい動植物を見て、しばし熱帯の雰囲気を味わうこともできよう。

８月からは「今を生きる古代型魚類展」もはじまった。３億年以上前の形質を今に保っている古代型魚類は、アフリカハイギョ、アマゾン川のピラルク、アロワナの仲間等迫力ある一族である。多くの水槽が並ぶこの展示から太古のパワーを感じることができそうだ。また、本学のモットー「稲のことは稲に聞け」に因んで行われる連続企画「稲と米－イネが私たちに教えてくれること」では、季節に合わせて展示を少しずつ変えながら、稲について学ぶコーナーとなっている。こちらも、開発学科教員の協力で、近年有名になったネリカをはじめ40を超える稲品種の育つ姿を収穫まで観察することができる。

世田谷キャンパスにお越しの際は、拓友会の皆さんにも博物館にぜひ、お立ち寄りいただきたい。また、「食と農」の博物館にふさわしい企画や展示のご提案、キッチンも完備したセミナー室の利用、さらには、館内に設置された商品紹介スペース「コマーシャルボックス」の利用（年間10万円）なども大歓迎である。

コマーシャルボックス、あるいは、博物館の展示やイベントについて、詳しくは食と農の博物館で検索してホームページをご覧ください。

熱帯作物に潜む力展　オープニングセレモニー

熱帯作物に潜む力展　展示風景

## 大学ベンチャーで国際貢献

**国際食料情報学部長**
**株式会社 メルカード東京農大**
社長　**豊原　秀和**

平成16年に大学ベンチャー「株式会社メルカード東京農大」が設立された。会社の理念は、農大教職員ならびに校友の力を結集し、消費者が安心して楽しめる食環境を作り、かつ農大の活力をアピールするとともに国際社会に貢献し、ビジネスに対する学生の実践教育の場を提供することにある。メルカード東京農大は、教職員が開発した商品や卒業生が関与した商品をインターネット（農大市場）上で販売。しかし、主流商品は、カムカムドリンク、カムカム酢やカムカムリキュールなどである。最初にカムカムとの出会いについて記す。

カムカムは、本学農業工学科卒業（S58）の鈴木孝幸氏が見いだした果物である。鈴木氏は、卒業後ペルー国ラ・モリーナ大学大学院に進学、アマゾン地域に適した作物の研究を進める中で、カムカムというビタミンCを果実100g中に2800mg含量し、その量はレモンの60倍、アセローラの2倍という果物がアマゾン河周辺の湖沼に自生していることを知る。

カムカムはフトモモ科の果物で、学名は*Myrciaria dubia*。雨季になると3～5ヶ月も水没し、水位が下がると花を咲かせ、果実を着ける不思議な果物。カムカム自生地の人々は、昔から果実を採取し、肌荒れ防止、風邪予防、高血圧、糖尿病に効果があるとして利用していた。しかし、カムカムの自生地周辺の住民は貧しい自給農民で、現金収入源が麻薬コカインの原料であるコカを栽培し生計を立てていることを知る。そこで、鈴木氏は、カムカムの普及がコカの代替え作物として貧農民を救済出来るのではないかと考え、ペルーにカムカム協会本部を設立、本学に協力を要請してきた。それを受けて本学では、カムカム協会東京本部を設立、日本におけるカムカムの商品開発と販売を担うことにした。

カムカム商品は、教職員、卒業生、カムカム協会、および株式会社メルカード東京農大がスクラムを組んで、商品開発から販売までを担当し、商品が売れることによってペルー農民の自立に貢献している。

このように本学の知的財産を結集すれば、バイオ燃料、環境、食の安全性など、本学が標榜する様々な問題の解決に繋がると考える。

## 農村貧困の解消に挑む！
## ～JBIC提案型調査の足跡～

昨年４月から、本学が全学を上げて取り組んできた国際協力銀行（JBIC）の提案型調査「マレーシア・サバ州持続的資源利用による貧困地域所得向上事業」（(株）パデコ・東京農大・九大による共同事業、６名からなる事業調査団）は、分厚な英文報告書の提出をもって去る５月に終了した。

45日間におよぶ苦しくも充実した現地調査の日々であった。サバ州北東部の急峻な山間に位置する調査対象地ガナ村。世帯総数の80%を極貧層が占めるこの村で、貧困の解消を目的としたパイロット事業の立案と計画、その実施をわずか１年で遂行しなければならなかった。事業の柱は、野菜の栽培と伝統手工芸品の製作およびその流通で決定した。

事業完了間際の５月初旬に現地を訪れたサバ州駐在の井口次郎リーダーから、一葉の写真が私のメールに配信され、驚いてしまった。見事に野菜が育っているではないか！（写真参照）。感きわまる瞬間であった。ことのほか厳しい自然環境におかれた不毛とも思えるかの地で、私たちの地道な努力がここに実を結ぼうとしている。ここにたどりつくまでの幾多の困難と試練をしみじみと噛みしめた。また、この同じメンバーで事業を続行したいと思った。

国際農業協力。その甘美なまでに響きわたる語感がたまらない。開発途上国の国づくりに役立とうとする東京農業大学の使命を、社会に発信し続けなければならない。

国際農業開発学科教授　板垣啓四郎

ガナ村で始まった野菜栽培のパイロット事業
（井口次郎氏　提供）

# 平成18年度日本農業普及学会賞（学術賞）を受賞して

鈴木　俊（農業開発政策研究室　教授）

## 1．はじめに

昨年10月、拙著『国際協力の農業普及』を出版いたしました。この内容は、人口急増と貧困削減に向けた途上国農業・農村開発のための、国際協力における農業普及の重要性と、普及システムの充実･推進の必要性について取りまとめたものです。というのも、私はこれまで、全国農業改良普及支援協会、日本国際協力機構（JICA）や海外農業教育・研究開発協会（SAEDA）によって、多くの途上国の現地調査機会に恵まれたからです。途上国を訪問する度に、農村の人々の多くが、将来展望の見えないままの生活を強いられている様子を知り、このまま見てみぬ振りはできないと考えておりました。この本は、これらの原稿を主として取りまとめ検討を加えたものです。概要を示すと、「序章 世界の人口と食糧問題」、「1章 農業開発協力普及論のすすめ」、「2章 農業開発協力の発生と展開」、「3章 農業･農村開発とは」、「4章 農業･農村開発と農業技術普及」、「5章 途上国における農業普及の実態と課題」、「6章 むすび」となっております。本年3月、これによって、平成18年度の日本農業普及学会賞（学術賞）の栄に浴することができました。私にとってはまさに思いもかけない栄誉でした。

## 2．農業普及学との出会い

私が農業普及の研究に入ったのは、30数年前の、未だ「技術移転」という言葉が新鮮に感じられた頃のことで、途上国の農業開発協力との関わりで農業普及を追いかけ始めた時からです。途上国の普及システムを追いかけているうちに、途上国の農業や社会･経済的発展段階と普及システムに違いがあり、各国の発展段階に応じた普及システムがあることに気づきました。それならば、日本の場合は如何だったかという動機から、改めて日本の農業普及を農業発展との関わりで見直すと、思ったとおりいくつかの段階と、技術開発と生産現場への導入・利用並びにこれらによる顕著な社会貢献がみられました(拙著『農業技術移転論』既刊)。これが普及に対する興味を持ち始めたきっかけになったと思います。

## 3．人口増加と食料問題に対する農業開発普及のすすめ

今日、地球人口は66億人といわれ、この中の80%が途上国に住んでおります。そして、その70～80%の人々は農村部で、かつて長塚節が『土』の中で訴えた、わが国鬼怒川沿い農村における「お品と勘次」達と同様な生活を営んでおります。一方30億人は1日2ドル以下の貧困生活を強いられ、8～12億の人々が飢餓に瀕しているといわれております。『国際協力の農業普及』で訴えたかったことは、これら問題解決の手段の一つとして国際協力における農業普及の重要性と、一層の充実･推進でした。何故なら、「いくらすばらしい技術や知識が開発されても、それらが国境を越え地域を越えて、途上国の農業生産の現場に導入され、利用されなければ何の意味も持たない」からです。

2050年の世界人口は92億～120億の間で増加すると予測されています。地球上の全耕地面積15億haからどのように食料を生産したらよいでしょうか。現在1人当たりの平均耕地面積は、0.23haとなります。しかし、この数字は50年前（1951～55年）には0.50ha、30年前（1971～75年）には0.39haで、毎年確実に減少しております。仮に、2050年の推定人口90億とすると、現在のままの耕地面積では1人当たり0.16haとなります。この中には水の便が悪く肥沃度に欠け、十分な温度も得られない条件不利な耕地を含んでおり、しかも稲作ばかりの作付けではないことを考え併せると、決して十分とはいえません。現に米国の生態学者E.P.オデウム(1970年)によると、食料生産用農地だけでも、米国南部の食生活水準で割り出すと1人当たり0.61haと試算しているほどです。

## 4．21世紀は農業開発の世紀・農業開発普及の世紀だ！

このように考えると、21世紀は食糧増産の世紀であり、農業･農村開発の世紀であるということができま

[株]東京アグリビジネス
TOKYO AGRIBUSINESS CO., LTD.
緑地防除管理･請負メンテナンス･資材販売
代表取締役　大橋　邦雄
（昭和49年　林学科卒業）
専務取締役　野瀬　忠
（農業拓殖学科18期）
取締役部長　高田　久雄
（農業拓殖学科18期）
〒228-0802　神奈川県相模原市上鶴間2-7-7
TEL 042(744)6237
FAX 042(744)6295

藤原養蜂場場長
(有)藤原アイスクリーム工場専務取締役
(株)藤原チェーン取締役
日本在来種みつばちの会会長
養蜂家　藤原　誠太
（拓殖21期）
〒020-0886
岩手県盛岡市若園町3番10号
TEL：(019)624-3001･3002
FAX：(019)624-3118
HP　：http://www.fujiwara-yahoo.co.jp/

す。このためには、現在人口が急増しつつある途上国への農業開発協力が今まで以上に必要となります。今後耕地面積の拡大が限界であるとするならば問題は農業開発を受け入れる側農業者の能力向上にあり、このためのコミュニケーション環境にあるのです。すなわち、途上国の農村に生活する人々が日常どのような人的環境の中で生活しているかということが重要な視点となり、彼らが生活する農村において、誰からどの様な情報を得、それをどの様に評価し決定して導入するかをみるとき、農家の人々が置かれている立場によってさまざまであり、全ての人々が平等・公平に有益な情報を得ることができる環境に置かれているとは限らないということです。農業者の中には近隣と親類や仲買人からの情報が全てであるような、情報から閉ざされたままの生活（農業を含む）を営んでいる人々も多く、彼らを取り巻くこのような環境こそ改善されなければならないということがはっきりしてきます。言い換えると、イノベーションの普及にはこれら情報に接する機会の少ない農家の注意をいかに喚起し、関心や興味を持たせ、導入のプロセスに組み込んでいくかが重要な課題となります。これすなわち、途上国のための農業開発普及の充実です。

今世紀は食糧問題や環境問題、貧困や飢餓の削減に向けた「国際協調・相互理解・共存共栄」実現のための本格的な協力支援が期待される世紀です。そのために農業開発普及の果たす役割はますます重要となってきます。21世紀は「農業開発の世紀すなわち農業開発普及の世紀」である、といっても過言ではないと思います。

## 国際農業開発学科の動静

| | | |
|---|---|---|
| 2006年4月 | 1日 | 入江憲治講師（任期制）が専任講師に着任、真田篤史副手（有給）が着任。高橋久光教授が学科長に、志和地弘信助教授が主事に就任。南雲晴与事務員が異動着任。豊原秀和教授が国際食料情報学部長に、夏秋啓子教授が「食と農」の博物館長に就任。 |
| | 6日 | 入学式　152名（男97名、女55名） |
| | 10日 | 前学期授業開始 |
| | 15～16日 | 学外オリエンテーション（八ヶ岳自然文化園、上級生20名参加） |
| | 13～19日 | 農業開発実習（第1班）学生45名<br>引率　三簾久夫助教授 |
| 6月 | 1～7日 | 農業開発実習（第2班）学生53名<br>引率　志和地弘信助教授、中曽根勝重助手 |
| | 24日 | 教育懇談会 |
| 7月 | 22～23日 | 地方教育懇談会 |
| | 25～31日 | 前学期定期試験 |
| 8月 | 1日～9月21日 | 夏季休業 |
| | 5～6日 | キャンパス見学会 |
| 9月 | 11～16日 | 1年生農業総合実習<br>（厚木総合農場にて） |
| | 22～28日 | 前学期追再試験および成績相談 |
| 9月 | 29日 | 後学期事前ガイダンス |
| 10月 | 2日 | 後学期授業開始 |
| | 4日～11月30日 | 後期カレッジ講座「食料問題解決の秘策を探る熱帯農業紀行」 |
| | 5日～11日 | 農業開発実習（第3班）学生37名<br>引率　大田克洋教授 |
| 11月 | 3日～6日 | 収穫祭（6日は体育祭） |
| | 3日 | 拓友会第47期総会、懇親会 |
| | 18日 | 地域後継者推薦入試、卒業生子弟入試 |
| | 19日 | 推薦入試、社会人入試 |
| | 30日～12月1日 | 世界学生サミット「新世紀の食と農と環境を考える」 |
| 12月 | 3日 | 併設高校優先入試、運動選手推薦入試、技術練習生優先入試 |
| | 26日～1月5日 | 冬季休業 |
| 2007年1月 | 9日 | 後期授業再開 |
| | 20～21日 | センター試験利用入試 |
| | 29日～2月2日 | 後学期定期試験 |
| | 30日 | 卒業論文提出締め切り |
| 2月 | 3日～9日 | 農業開発実習（第4班）学生51名<br>引率　入江憲治講師 |
| | 13日 | 優秀卒業論文発表会 |
| | 22～28日 | 後学期追再試験および成績相談 |
| 3月 | 20日 | 卒業式 |

株式会社 ムラカミ シード
MURAKAMI SEED CO.,LTD

本　　社
〒309-1738　茨城県西茨城郡友部町大田町341
TEL 0296-77-0354（代）　FAX 0296-77-1295

内原研究農場
〒319-0323　茨城県東茨城郡内原町鯉淵九ノ割5986
TEL 029-259-6332（代）　FAX 029-259-6226

ガーデンセンター花みどり本店
〒319-0323　茨城県東茨城郡内原町鯉淵九ノ割5986
TEL 029-259-6332　FAX 029-259-6226

ガーデンセンター花みどり水戸店
〒310-0844　茨城県水戸市住吉町48-8
TEL 029-247-8722　FAX 029-247-8723

代表取締役社長　村上典男（拓殖23期）　村上　登（拓殖26期）　村上忠義（拓殖29期）

# 拓 友 会 賞

## ダイジョ（*Dioscorea alata* L）の染色体観察技術の改良

**バビル・パチャキル・カラリトタティル**（インド出身）
指導教員　**豊原秀和**（熱帯作物学研究室）

バビル君は、大学一年生の時から熱帯作物学研究室に所属し、熱心に研究活動を行ってきました。バビル君がインドから日本へ留学してきたのは高校生の時ですが、大学入学時には既に日本語検定一級を取得しており、語学の面でも問題はありませんでした。バビル君は、研究室活動を行う中で、特に種間や種内に多様な倍数性変異を持つヤムイモに興味を持ちました。その中でも、ヤムイモの一種であるダイジョ（*Dioscorea alata*）は、通常、塊茎によるクローン増殖が行われていますが、種内に二倍体（2n=2x=20）から八倍体（2n=8x=80）にわたる広範な倍数性変異があり、組織培養などにより、カルスから再分化する植物には、かなり高頻度で倍数性変異が現れます。ダイジョに特有の倍数性変異の研究には染色体観察技術が必要ですが、ダイジョの染色体は小さく数が多いうえに、細胞周辺の粘質な多様類や細胞内の蓚酸結晶などが染色体観察の大きな障害となっています。そこで、バビル君は、ダイジョの染色体観察技術の改良を試みました。

第一章では、長時間（36時間）の冷水前処理によるアセトカーミン押しつぶし法により、細胞分裂中期の鮮明な染色体像を観察することに成功しました。この新しい染色体観察法により、ダイジョ品種「あらた」の染色体数が四倍性の 2n=4x=40 であることを確認しました。

その結果を踏まえて、第二章では「あらた」を内部標準とするフローサイトメトリーにより、ダイジョ品種「沖縄Ａ」自体、それから出現した体細胞変異体、および復帰変異体の３クローンの倍数性を調べ、すべてが四倍体であり、この体細胞変異は倍数性によるものではないことを明らかにしました。

今後、ダイジョ倍数性体細胞変異の発生機構の解明や異数性，核型，染色体分析などの基礎研究にも、また、体細胞変異を伴わない挿木繁殖による種苗増殖や遺伝資源の保全などの実用的研究にも、精巧な染色体観察技術が不可欠となると考えられます。

学部を優秀な成績で卒業しましたが、研究を継続したいとの本人の意向が強く、さらには研究室教員の研究を継続させたいとの考えも一致したことから、18年度大学院博士前期課程に進学しました。本年８月から６ヶ月間の予定でナイジェリア・イバダンにある国際熱帯農業研究所（IITA）に派遣し、染色体観察技術の研究を継続させています。バビル君の研究成果は、IITAの研究者からも注目されており、世界のヤムイモ研究の指針になると考えています。

## ヤムイモ研究雑感、IITAにて

国際農業開発学専攻　博士前期課程１年
熱帯作物学研究室　**バビル　P.K.**

私は2007年の７月から2008年の２月までナイジェリアにある国際熱帯農業研究所（IITA）でヤムイモの細胞遺伝学に関する研究を行っています。

ナイジェリアでは世界のヤムイモ総生産量の約66%が生産されており、重要な食用作物の一つです。ヤムイモは他の作物より好んで食べられていますが、栽培に重労働を必要とする作物であるため米やキャッサバなどと比較すると高価です。

IITAでは高収量、ウイルス抵抗性などの特徴を持つ系統や生育の旺盛な品種、また品種の早生化などの育成を目標に育種を行っています。しかし、効率的に育種を行うために重要である染色体数に関する情報はその観察が困難である上に種や品種によって染色体数が異なるためいまだ一部の材料でしか明らかになっていません。

私は現在、アフリカで主に食べられているホワイトヤム、イエローヤムやアジア、アフリカの広範囲で栽培されているアジア起源のダイジョの染色体を少しでも効率的に観察できるよう、染色体観察技術の改良を行っています。効率的な染色体観察技術を確立することで、細胞遺伝学的研究が行いやすくなり、今後、種間交雑や体細胞変異による優良系統の選抜が進展することが期待されます。今後は確立した染色体観察技術を用いて、IITAで保存している育種の材料となる系統の染色体数を確定していく予定です。

研究に集中できる環境が整っている上、様々な農業分野で研究を行っている日本を含む世界各国からの研究者と交流ができることが何よりも勉強になっています。アジア以外の国に行ったことがない私にとってアフリカは未知の世界でした。IITAでナイジェリアをはじめとするアフリカ各国の人々と交流や情報交換ができるようになり、アフリカを身近に感じられるようになったとようやく実感し始めています。

ホワイトヤムとイエローヤムの種間雑種の交配作業

## 拓 友 会 賞

### スイートピー切り花におけるデジタル糖度計ならびに非破壊計測器を用いた迅速品質評価法の開発

**坂　賢忠**（ばん　よしただ）
指導教員　**高橋久光・井上知昭**

スイートピーは、日本では早春を代表する切り花として人気が高いが、生産者によって品質保持期間（花持ち）が異なる。この切り花の品質保持期間は花弁の糖含量が高いほど長いことが明らかにされているが、生産現場で品質評価する方法は確立されていない。そこで、生産あるいは流通段階で迅速にできる品質評価方法を開発するため、デジタル糖度計の利用について検討した。

まず、デジタル糖度計による測定の可能性について調査したところ、高速液体クロマトグラフィーによる小花の糖含量とデジタル糖度計の値との間には強い相関が認められ、利用可能とみられた。次に、小花の測定部位を検討したところ、旗弁＋翼弁の測定が迅速で精度も高かった。測定時刻については栽培中の花弁（旗弁と翼弁）糖度は、日変動がみられるものの、どの時間に採花しても３時間以上給水をすればほぼ同一の値となった。そこで、各産地の切り花について測定したところ，花弁糖度が高いほど品質保持日数が長く、実用性が確認された。また，非破壊による計測を試みたところ．非破壊測定器（FANTEC社製）もデジタル糖度計と同様に品質評価の可能性が示唆された。

このように、デジタル糖度計を用いた品質評価は、迅速に測定でき、現場での利用が期待され、研究機関でも追試が開始され、今後の発展が期待される。なお、この内容は坂君が日本熱帯農業学会および園芸学会に口頭、ポスター発表した。卒業後は、これらの成果が活用できる花卉市場関係に就職し、将来が嘱望されている。

### 拓友会賞を受賞して

坂　賢忠

学生時代は奨学金とアルバイトで生活をして、さらに研究活動することは苦難の連続でした。それだけに、拓友会賞を受賞できたことは、大変うれしく思います。ご指導いただいた先生方、支えていただいた学友に感謝いたします。現在は、東京の中央卸売市場である大田市場の花卉卸売り会社、株式会社フラワーオークションジャパン、いわゆる花の市場で働いています。以下、近況を報告させていただきます。

私は切花の品質評価に興味を持ち、研究し、さらに、学生時代に学んだことを生かし、社会に貢献できればと考えていたのだが、念願の職業に就くことができたことは幸いであった。

仕事は生産者から花を集め、必要とする人へ公正な価格で流通させることである。しかし、花の価格は天候などのさまざまな要因により毎日めまぐるしく変動し、その対応策も大変である。業務は早朝や夜勤、時には長時間勤務になる等ハードな面もある。現在の仕事は、トラックから切花の荷降ろし、仕分けなど、重労働を伴うものであるが、やりがいを感じている。
それは、生産者ひいては花業界のために少しでも力になりたい、大げさに言えば社会貢献したい思いからである。こう考えるのは農大での様々な体験や研究活動が根底にある。しかし、実際に就職してみると、理想郷の大学での思いとは異なり、取り組むほどに農業の深刻さも思い知らされている。生産者の厳しい営農状況にも直面し、なんとかしたいという気持ちが強くなっている。

まだ、仕事は「花のいろは」を覚えている段階で、夢を忘れかけそうな時は、拓友会賞を受賞したことが大きな励みであり、支えになっている。さらに生産から消費までのことを学び、実践していく中で、少しでも、社会に貢献できる人間になれるように努力したい。

職場にて

## 平成19年度　課外活動団体の対外試合における開発学科学生の成果・活躍

**ボディビル・パワーリフティング部**

第82回関東学生パワーリフティング選手権
11月25･26日（埼玉大体育館）
団体３位、男子100kg級３位　本田直也（開発３年）

**自動車部**

全日本及び全関東総合杯　12月19日
全日本総合杯　女子団体優勝、個人３位
赤間奈緒（開発４年）
全関東総合杯　準優勝　赤間奈緒（開発４年）
全関東学生ジムカーナ選手権大会
女子団体優勝、女子個人優勝　赤間奈緒（開発４年）
これらの成績が認められ平成18年度農友会賞　優秀

個人賞を受賞

**陸上部**

第83回箱根駅伝関東学連選抜チームとして１月２日
１区　外丸和輝（開発２年）
８区　椎谷智広（開発３年）が出場

**社交ダンス部**

第94回東都大学学生競技ダンス選手権大会
4月22日（独協大学体育館）
団体　準優勝、
フォーメーションの部　優勝、
モダン　タンゴの部　準優勝
小林潤一（開発４年）・小川真代（醸造４年）ペア

## 陸上部

今年の正月、開発学科から２人の学生が箱根駅伝を走りました。農大としての出場は叶わなかったものの、関東学連選抜チームの一員として、１年生（当時・現在２年生）の外丸和輝君（埼玉・農大三高出身）と、２年生（当時・現在３年生）の椎谷智広君（千葉・八千代松蔭高出身）が選出され、外丸君は１区を、椎谷君は８区を任されました。

近年の箱根駅伝は、各校の力が非常に均衡していることから、レースの流れを作る１区の役割が重要視されています。そのため各大学がエースや準エースクラスの選手を投入する傾向にありますが、１年生ながらその重役を任された外丸君は、常に集団の前方をキープし、ラストの競り合いで少し遅れをとったものの、区間２位と約30秒差の１時間５分44秒（区間13位）で襷をリレーしました。本人は、予想外に集団がスローペースとなった今回の展開に、「佐藤悠基*を追って飛び出すことも考えたのですが・・・次はもっと力をつけて、レースの主導権を握る走りがしたいです。それと、やっぱり来年はチームで。」と語ってくれました。

椎谷君の走った８区は、箱根駅伝の10区間中、最もブレーキ等のアクシデントが起こりやすい区間ですが、椎谷君も、気温の上昇と後半の上り坂に苦しみ、思うような走りが出来ず、１時間11分50秒で区間20位となってしまいました。しかし、「箱根の借りは箱根で返します。」と、この経験を糧に来年のチームでの出場へ向け、良い経験になったようです。

その後、外丸君は、今年３月に行われた日本学生ハーフマラソン選手権で自己ベストを更新し、順調に記録を伸ばしています。さらに、今年７月の札幌国際ハーフマラソンでは、駒大のエース宇賀地（２年）に次ぐ日本人学生２位と健闘しました。椎谷君は、春のトラックレース直前に故障してしまい、出遅れていましたが、同じく札幌国際ハーフマラソンで復調の兆しをみせ、現在は完全復活し、練習に励んでいます。今年の農大は、２人の他にも４月の焼津ハーフマラソンで優勝した清水和朗君（造園２年）や、全日本インカレ3000mSC　９位の岡村翔君（経済４年）など、多くの選手が実力をつけています。上位での予選突破を目標に、４年ぶり83回目の出場をかけた第84回箱根駅伝予選会は10月20日（土）立川市の国営昭和記念公園および周辺道路において行われます。応援宜しくお願い致します。

＊佐藤悠基：高校時代に高校新記録を更新し、東海大に進学後、学生界を代表する選手へ。今年の箱根駅伝は１区を走る。スタートの号砲から１人飛び出し、区間新記録を更新した。（陸上部　部長　樫村修生）

箱根駅伝直前の調整走の様子　前・椎谷

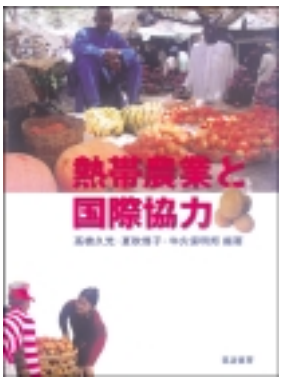
今年から国際農業開発学科を志望する中高生向けに学科を分かりやすく紹介するホームページ（http://www.nodai.ac.jp/int/develop/index.html）を公開しました。海外実習や国内（学内・学外）実習、教員・学生の調査の様子、研究の様子について学部生・院生・教員からの投稿記事を随時掲載中。（http://nodai.cc-town.net/modules/nmblog/categories.php）。

国際協力を志すご子弟や教え子の進学先を考えていらっしゃる方に是非一度アクセスして頂きたい。

## 書籍のご案内

開発学科創立50周年を記念して、世界各地のさまざまな分野で活躍している東京農業大学国際農業開発学科卒業生の声をまとめた一冊。国際農業協力を通して何を学び、どのように国際協力への道筋をつけていったのかなど、写真や図表を交えながら具体的に記す。様々なアプローチで国際協力に携わりたい人へ、現場からの生の声が聞けます。

出版社：東京農業大学出版会（2006/12）
著　者：東京農業大学国際農業開発学科編
ISBN-10：4886941087
定　価：本体1600円＋税




開発学科創立50周年を記念して、学科教員が、長年の経験をもとに執筆、2007年10月に発行された。

途上国の位置する熱帯農業に対する多面的な理解の上に、国際協力に よって問題の解決を図ろうとする国際農業開発学を学ぶ学生や院生には 必読の一冊。途上国の農業・農村開発、熱帯農業の特性と可能性、環境 保全と農業技術等のテーマごとに、実例を多く入れて解説している。また、用語も丁寧に説明されている。情熱に加えて必要なのは、知識や技術。あなたは、どのようなアプローチで熱帯農業や国際協力に貢献しますか？

出版社：筑波書房（2006/11）
著　者：高橋久光・夏秋啓子・牛久保明邦　編著
ISBN-10：4811903102
定　価：2800円＋税

## 第49期総会および懇親会のご案内

第49期の拓友会総会および懇親会を次のとおり開催致します。

記

**総会**

1．日時　平成19年11月３日（土）午前11時より12時まで
2．場所　11号館２階 化学系実験室（造園科学科の建物）
3．次第　(1) 一般経過報告
(2) 議事
① 第48期事業報告　② 第48期決算報告
③ 第49期事業計画案　④ 第49期予算案
⑤ その他

**懇親会**

1．日時　平成19年11月３日（土）正午より
2．場所　11号館２階 化学系実験室（造園科学科の建物）
3．会費　４千円（配偶者、子供の同伴歓迎致します。配偶者および子供は、一人につき２千円）

**出欠通知**

総会および懇親会への出欠は10月26日までに、出欠を郵送されるか、FAXにて（03）5477-4032（国際農業開発学科事務室）までお送り下さい。

なお、懇親会のみの参加もお気軽にお申し込み下さい。
E-Mail　h1shiwac@nodai.ac.jp

なお、本年度より代議員会は開催いたしません。

---

**JICA地球ひろば**に農大大学院　農学研究科　博士前期課程　国際農業開発学専攻１年齋藤修平くんのタイNew Theory農家現地調査レポートが掲載された。簡単に概要を紹介したい。

**Sing bur県でのNew Theory農家の経営実態調査を2005年３月から2006年８月までに３回実施し、卒業論文にまとめた。2006年８月から10月下旬にかけてタイ北部と中央部を大洪水が襲い、調査地も例外なく多くの農家が水没し財産を失いました。しかし、New Theory農家の方は「一からやり直します。」と洪水によってすべての作物や家畜が流され、荒れ地となってしまった農地を前にして涙ながらに話してくれました。**

最高級象牙会社実印から三文判まで激安!!　代表挨拶・略歴・会社案内・マンションの詳細内容などはこちら → 41858.com/kousei.html　TEL 048-282-8152㈹
判子屋激安オンラインショップ　良い判子屋ドットコム　41858.com
直営アンテナショップは、南鳩ヶ谷駅東口の判子屋鳩ヶ谷店・川口安行店・川口駅西口の耕房川口店の各店まで
塾講師募集！→ 小学生から高校生までの個別指導の学習塾始めました!勤務地は埼玉の鳩ヶ谷、川口、浦和の各校。
社長募集！→ 経営能力のある、あなたの夢に投資します!履歴書、やる気のある論文、事業企画書を持参の上面接します。
医療人目指して国家試験の猛勉強中!☆ 棚板からビル・マンションまで建築のことならお任せ下さい。土地運用のコーディネートも承ります
TK加藤ビル関連グループ主宰 加藤耕房有限会社代表取締役 ㈱テラ・アクア総合研究センター取締役 株式会社田村工務店顧問 学生奇業家（拓殖30期）医療コンサルタント マンションデザイナー 加藤耕誠 ☆ 屋上緑化・医・食・獣マンション「テラ・コパン」入居開始!自社物件医療ビル・高齢者向住宅計画中
☆ 農地・宅地お譲り下さい。以上お問い合わせは → http//www.hyaqshow@41858.com
BMWバイクで風になりませんか？→ 海までダイビングをやりに行く!温泉や旨いものを食いに行く!そんなライダー仲間を募集しています
←の言葉は[妻に感謝] 大取締役（拓殖31期）加藤深雪　私自身もR1150GSで北海道旅行したり、RTを乗り回して楽しんでいます。タンデマーも大歓迎!!

## 第47期　一般会計収支決算

**一般会計**　（平成17年10月1日～18年9月30日）

| | 予算額 | 決算額 | 差異 |
|---|---|---|---|
| 収入の部 | | | |
| 1. 会費 | 2,000,000 | 1,780,000 | ▲ 220,000 |
| 2. 事業 | 390,000 | 360,000 | ▲ 30,000 |
| ニュース広告 | 240,000 | 240,000 | 0 |
| 行事等収入 | 150,000 | 120,000 | ▲ 30,000 |
| 3. 寄付等雑収入 | 30,000 | 10,000 | ▲ 20,000 |
| 4. 前年度繰越 | 54,523 | 54,523 | 0 |
| 5. 特別会計より繰入 | 0 | 417,924 | 417,924 |
| 合計 | 2,474,523 | 2,622,447 | 147,924 |

| | 予算額 | 決算額 | 差異 |
|---|---|---|---|
| 支出の部 | | | |
| 1. 事業支出 | 1,240,000 | 1,244,980 | 4,980 |
| 総会費 | 150,000 | 150,000 | 0 |
| 新入会員歓迎会費 | 200,000 | 200,000 | 0 |
| 名簿整備 | 100,000 | 100,000 | 0 |
| ニュース発行 | 450,000 | 454,980 | 4,980 |
| 拓友会賞 | 40,000 | 40,000 | 0 |
| 在校生への補助 | 200,000 | 200,000 | 0 |
| 50周年事業への助成 | 100,000 | 100,000 | 0 |
| 2. 管理費 | 1,070,000 | 1,377,467 | 307,467 |
| 会議費 | 50,000 | 48,324 | ▲ 1,676 |
| 印刷費 | 100,000 | 8,625 | ▲ 91,375 |
| 交通費 | 60,000 | 46,000 | ▲ 14,000 |
| 通信費 | 600,000 | 1,148,668 | 548,668 |
| 消耗品費 | 110,000 | 94,500 | ▲ 15,500 |
| 雑給費 | 120,000 | 30,000 | ▲ 90,000 |
| 雑費 | 30,000 | 1,350 | ▲ 28,650 |
| 3. 特別会計積立金 | 100,000 | 0 | ▲ 100,000 |
| 4. 予備費 | 64,523 | 0 | ▲ 64,523 |
| 5. 次年度繰越 | 0 | 0 | 0 |
| 合計 | 2,474,523 | 2,622,447 | 147,924 |

**特別会計**

| | 予算額 | 決算額 | 差異 |
|---|---|---|---|
| 収入の部 | | | |
| 前年度繰越 | 2,220,562 | 2,220,562 | 0 |
| 特別会計積立金 | 100,000 | 0 | ▲ 100,000 |
| 雑収入 | 15,000 | 721 | ▲ 14,279 |
| 合計 | 2,335,562 | 2,221,283 | ▲ 114,279 |

| | 予算額 | 決算額 | 差異 |
|---|---|---|---|
| 支出の部 | | | |
| 50周年事業への仮払 | 1,500,000 | 1,500,000 | 0 |
| 次年度繰越 | 835,562 | 303,359 | ▲ 532,203 |
| 一般会計に繰入 | 0 | 417,924 | 417,924 |
| 合計 | 2,335,562 | 2,221,283 | ▲ 114,279 |

## 第48期　一般会計収支予算（案）

**一般会計**　（平成18年10月1日～19年9月30日）

| | 前年度 | 本年度 | 差異 |
|---|---|---|---|
| 収入の部 | | | |
| 1. 会費 | 2,000,000 | 2,200,000 | 200,000 |
| 2. 事業 | 390,000 | 400,000 | 10,000 |
| ニュース広告 | 240,000 | 250,000 | 10,000 |
| 行事等収入 | 150,000 | 150,000 | 0 |
| 3. 寄付金等雑収入 | 30,000 | 30,000 | 0 |
| 4. 前年度繰越 | 54,523 | 0 | ▲ 54,523 |
| 合計 | 2,474,523 | 2,630,000 | 155,477 |

| | 前年度 | 本年度 | 差異 |
|---|---|---|---|
| 支出の部 | | | |
| 1. 事業支出 | 1,240,000 | 1,290,000 | 50,000 |
| 総会費 | 150,000 | 150,000 | 0 |
| 新入会員歓迎会費 | 200,000 | 200,000 | 0 |
| 名簿整備 | 100,000 | 150,000 | 50,000 |
| ニュース発行 | 450,000 | 475,000 | 25,000 |
| 拓友会賞 | 40,000 | 40,000 | 0 |
| 在校生への補助 | 200,000 | 200,000 | 0 |
| HP管理委運営費 | 0 | 75,000 | 75,000 |
| 50周年事業への助成 | 100,000 | 0 | ▲ 100,000 |
| 2. 管理費 | 1,070,000 | 1,070,000 | 0 |
| 会議費 | 50,000 | 50,000 | 0 |
| 印刷費 | 100,000 | 100,000 | 0 |
| 交通費 | 60,000 | 60,000 | 0 |
| 通信費 | 600,000 | 600,000 | 0 |
| 消耗品費 | 110,000 | 110,000 | 0 |
| 雑給費 | 120,000 | 120,000 | 0 |
| 雑費 | 30,000 | 30,000 | 0 |
| 3. 特別会計積立金 | 100,000 | 200,000 | 100,000 |
| 4. 予備費 | 64,523 | 70,000 | 5,477 |
| 合計 | 2,474,523 | 2,630,000 | 155,477 |

**特別会計**

| | 前年度 | 本年度 | 差異 |
|---|---|---|---|
| 収入の部 | | | |
| 前年度繰越 | 2,220,562 | 303,359 | ▲ 1,917,203 |
| 特別会計積立金 | 100,000 | 200,000 | 100,000 |
| 仮払金払戻し | 0 | 1,500,000 | 1,500,000 |
| 雑収入 | 15,000 | 1,000 | ▲ 14,000 |
| 合計 | 2,335,562 | 2,004,359 | ▲ 331,203 |

| | 前年度 | 本年度 | 差異 |
|---|---|---|---|
| 支出の部 | | | |
| 次年度繰越 | 835,562 | 1,004,359 | 168,797 |
| 50周年事業への寄附 | 0 | 1,000,000 | 1,000,000 |
| 50周年事業への仮払 | 1,500,000 | 0 | ▲ 1,500,000 |
| 合計 | 2,335,562 | 2,004,359 | ▲ 331,203 |


平成15年度　農林水産大臣賞受賞

活性水飼育
日本の豚　やまと豚

代表取締役社長 八日市屋 敏雄（39経卒）
取締役 佐藤 征八（41経卒）
常務取締役 前田 隼彦（42拓卒）
他、農大卒27名活躍中

株式会社フリーデン
本　社 〒259-1201 神奈川県平塚市南金目227
TEL.0463-58-0123/FAX.0463-58-6314

生産部門／（群馬県）梨木農場、タカナラ農場、吾妻・大平牧場
（岩手県）大東農場、一関種豚センター、南山形牧場
（福島県）都路牧場・東和牧場「日本SPF豚協会認定牧場」
流通部門／営業統括部、伊勢原工場、平塚工場〈神奈川県〉
北関東事業部〈群馬県〉　東海事業部〈愛知県〉
新規事業部門／豚肉創作料理 レストラン「やまと」〈東京都〉
鳩山フラワーガーデン〈埼玉県〉、ハイエット事業部〈神奈川県〉
関連会社／（株）ダイワフーズ〈東京都〉、（株）ハム工房都路〈福島県〉
エス・エム・シー（株）〈神奈川県〉、Frieden(H.K)Co.,Ltd.〈香港〉

URL・http://www.frieden.co.jp

## 学生による研究室紹介

――― 農業開発政策研究室 ―――

本研究室は、鈴木俊教授、杉原たまえ准教授のご指導のもと、主に、途上国農村における農業・農村開発について、日々研究に取り組んでいます。

**◎研究内容**

フィールドは個々で異なりますが、農業・農村開発とそれを支援する政策や援助協力の研究、そして協力活動に欠かせない地域社会・文化的構造や農村の生産関係や生活実態についての理論的、実証的研究を行っています。

具体的には、農業の技術移転、農業普及、農業教育、農村で生活する住民（特に、従来農村開発の担い手とはみなされてこなかった女性・児童・高齢者・障害者）と開発などをテーマに研究を進めています。

**◎研究室活動**

私たちの研究室では、室員は「１人１テーマ」を基本に様々な視点から調査・研究を行っています。収穫祭では研究室の活動成果を発表する場として、室員一同１つのテーマに取り組み展示発表を行っています。

また、毎週火曜日に開かれる先生方との昼食会で親睦を深め、定例ゼミでは専門知識を学んでいます。さらに、時間のある人が自由に自分の興味のあるものについて行う個別ゼミがあり、そこでは互いに刺激を受けながら切磋琢磨し、新たな視野を広げていく良い機会となっています。

タイでの農村調査（ナコンパトムの農村）にて

**◎研修旅行**

毎年、国内外で研修旅行を行っています。先生方と実際に現場に行くという経験をすることで、普段研究室の中にいるだけでは感じることのできない、新たな問題点や興味を見つける絶好の機会になっています。

これらの活動を通して、共通のテーマである「農業・農村社会のよりよいあり方」をどのようにしたら実現できるかを追求しています。

具体的なテーマとしては、「開発過程における周辺化された人々の排除と包摂に関する研究」、「南西諸島の農村開発」、「途上国における一村一品運動の取組み」などです。

なお、2007年８月に、１年間ハワイに留学されていた杉原先生が帰国され、研究室活動がより一層充実したものとなっています。

東京農業大学技術開発！
カムカム商品のご案内

カムカムドリンク

果汁12%ドリンク用
１箱（１缶190cc 入×30 缶）
¥4,800＋送料¥ 500

カムカム果汁100

果汁100%ドレッシングなどに
１箱（１瓶200cc 入×6瓶）
￥5,400＋送料￥500

世界一のビタミンC含有量

カムカム協会は、これまで貧しさ故にやむをえずコカ栽培をしていた農民に現金収入の代替作物としてカムカムを栽培させることにより麻薬撲滅にむけて取り組んでいます。

ご注文はこちらまで
TEL＆FAX　03-5477-2404
カムカム協会東京本部
代表　豊原　秀和

おいしさは愛。
ハム工房ぐろーばるのハム&ソーセージは、〈和豚もちぶた〉を100%使用し
ひとつひとつ手間と時間をかけてつくられます。

ハム工房
ぐろーばる

〒377-0052 群馬県勢多郡北橘村大字上箱田800
TEL.0279-52-3746 FAX.0279-52-3581
フリーダイヤル 0120-44-3746
ホームページアドレス http://www.gpf.co.jp
グローバルピッグファーム株式会社
代表取締役　赤地　勝美　（昭和39年卒業）